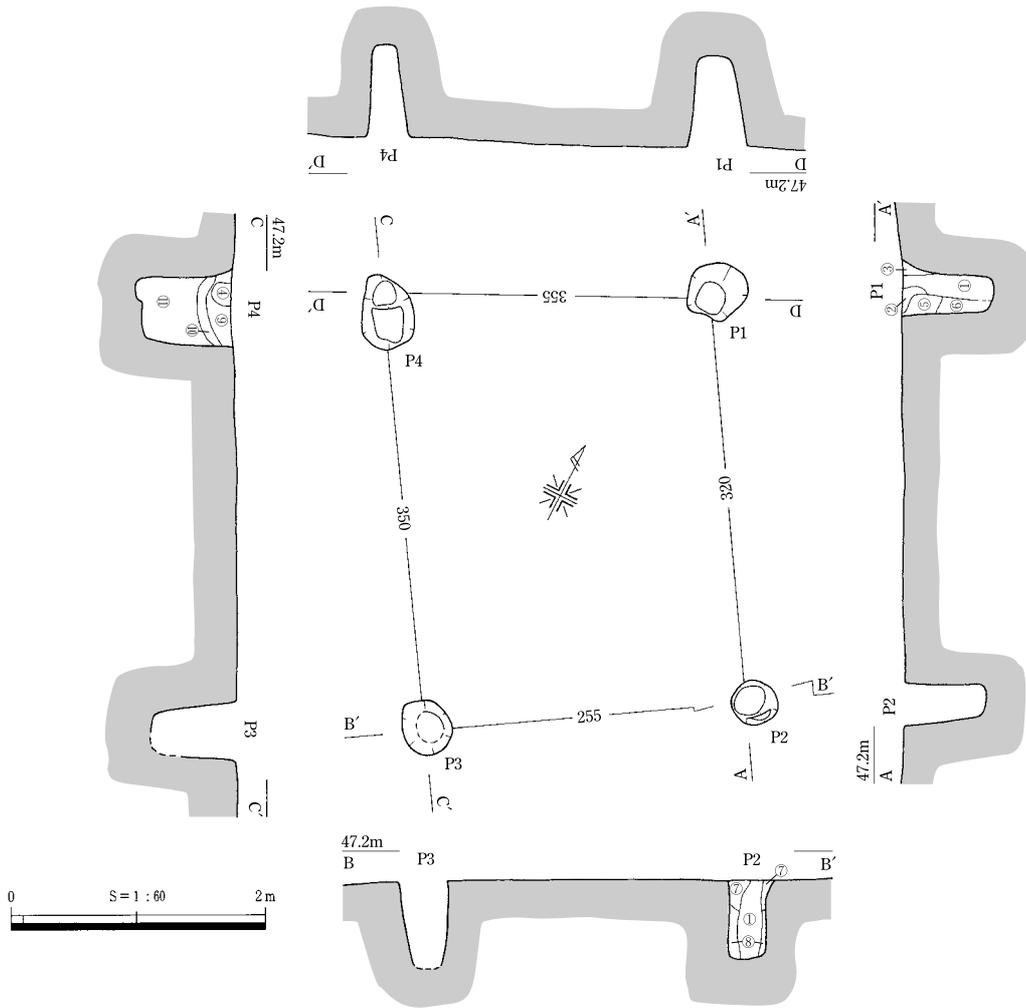


- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒多混。
- ② 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1~2 cm程度のロームブロック (II層主体) 多混。
- ③ にぶい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1~2 cm程度のロームブロック混。
- ④ にぶい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1 cm以下のローム粒混。
- ⑤ にぶい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1 cm以下のローム粒混。締りやや弱。
- ⑥ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1~2 cm程度のロームブロック混。
- ⑦ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 1 cm程度の灰黄褐色土ブロック少混。粘性やや強。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm程度のロームブロック混。
- ⑨ にぶい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1~2 cm程度のロームブロック混。粘性やや強。
- ⑩ にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ⑨層に類似するが、ロームブロックより多混。粘性強。
- ⑪ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1~2 cm程度のロームブロック (II層主体) 混。
- ⑫ 灰黄褐色土 (10YR4/2) ⑩層によく似るが、φ 1 cm以下のローム粒混。
- ⑬ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm以下のローム粒多混。
- ⑭ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1~3 cm程度のロームブロック多混。粘性やや強。
- ⑮ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1~2 cm程度のロームブロック多混。粘性やや強。
- ⑯ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 1 cm程度の褐色土ブロック混。粘性強、ローム主体。
- ⑰ にぶい黄褐色土 (10YR5/4) φ 1~5 cm程度のロームブロック多混。粘性やや強。
- ⑱ 褐色土 (10YR4/4) φ 1~5 cm程度のロームブロック多混。粘性やや強。
- ⑲ 褐色土 (10YR4/4) φ 1~5 cm程度のロームブロック (II層主体) 多混。
- ⑳ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1~3 cm程度のロームブロック (II層主体) 多混。
- ㉑ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 1~2 cm程度の褐色土ブロック少混。粘性やや強、ローム主体。
- ㉒ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ㉓ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ㉔ 褐色土 (10YR4/4) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ㉕ 黄褐色土 (10YR5/6) φ 1 cm程度の褐色土ブロック少混。粘性強、ローム主体。
- ㉖ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 1 cm程度の褐色土ブロック少混。粘性強、ローム主体。
- ㉗ 明黄褐色土 (10YR6/6) ㉖層と類似、褐色土ブロックをより多混。
- ㉘ 灰黄褐色土 (10YR5/2) φ 1 cm以下のローム、黒褐色土粒少混。
- ㉙ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1~3 cm程度のロームブロック多混。粘性やや強。
- ㉚ 明黄褐色土 (10YR6/6) φ 1~2 cm程度の灰黄褐色土ブロック少混。
- ㉛ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1~3 cm程度のロームブロック多混。
- ㉜ 褐色土 (10YR4/4) φ 1~3 cm程度のロームブロック多混。
- ㉝ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。

第14図 SB2



- ① 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm以下のローム粒混。縮りやや弱。
- ② にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1 cm程度のロームブロックを少混。
- ③ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ②層に類似。
- ④ 褐色土 (10YR4/4) φ 1 cm以下のローム粒混。粘性やや強。
- ⑤ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 1 cm程度のロームブロック多混。
- ⑥ 灰黄褐色土 (10YR5/2) φ 1~2 cm程度のロームブロック混。
- ⑦ にぶい黄褐色土 (10YR5/3) φ 1~3 cm程度のロームブロック多混。
- ⑧ 灰黄褐色土 (10YR5/2) φ 1~2 cm程度のロームブロック多混。粘性やや弱。
- ⑨ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1~3 cm程度のロームブロック多混。粘性やや強。
- ⑩ 黄褐色土 (10YR5/6) φ 1 cm程度の灰黄褐色土ブロック混。粘性強、ローム主体。
- ⑪ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1~5 cm程度のロームブロック (Ⅲ層主体) 多混。粘性やや強。

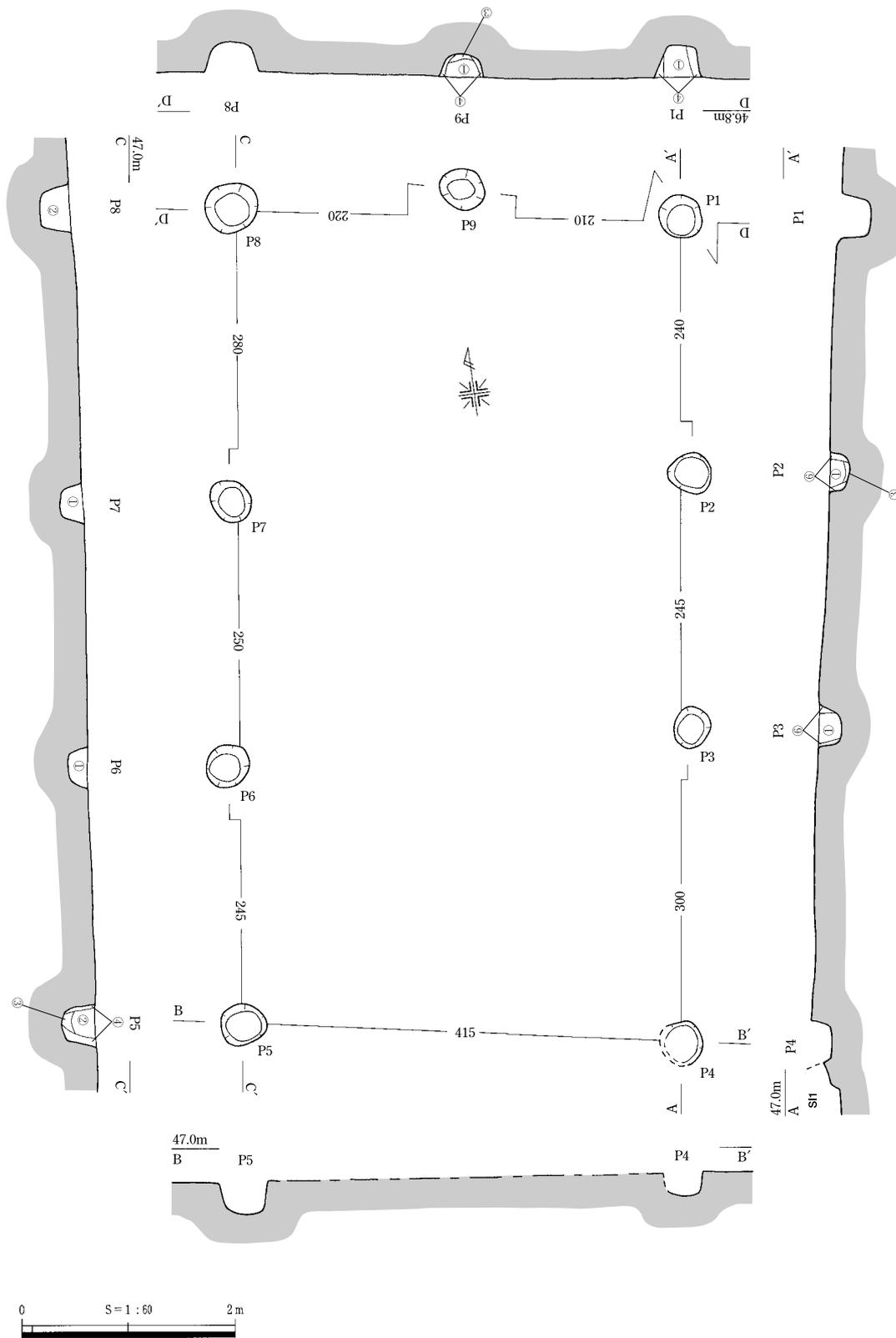
第15図 SB3

このうちP3は根の攪乱を受け、ピット南部分と埋土の大半が失われていた。P1・2・4において柱痕跡は認められないものの、P4では、底面に径15cm程度の柱のあたりと思われる痕跡がある。ピットの平面形は長軸34~60cm、短軸32~48cmの不整な円形で、検出面からの深さは62~76cm、底面の標高は46.2~46.4mを測る。P1・2・4には柱掘り方埋土を確認した。柱掘り方埋土には、Ⅱ・Ⅲ層などに由来するローム土から成る混合土が使われており、2~3回に分けて土を詰めた様子が窺える。

本遺構から遺物が出土しておらず埋没時期は不明であるが、近接のSB2とは主軸の方向が一致し、柱掘り方埋土の様相も類似することから、同時期の建物の可能性がある。

SB4 (第16図、表12、PL.8・9)

D4~E5グリッド、標高47m付近に位置する。Ⅰ・Ⅱ層上面精査中に検出した遺構で、P4がSI1埋



- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のII層粒、炭化物少混。
- ② 黒褐色土 (10YR3/2) ①層に類似するが、炭化物を含まない。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 2 cm以下のII層ブロック少混。
- ④ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1 cm以下のII層粒を微混。
- ⑤ 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1 cm以下のII層粒、ローム粒微混。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 0.5 cm以下のローム粒多混。

第16図 SB4

土を切る。P1がSD8と重複するが先後関係は不明である。主軸はN-7°-Eをとり、隣接するSB1とは軸の向きが異なる。桁行3間(7.8m)、梁行2間(4.2m)の建物で、平面積は32.9㎡を測る。側柱はP1~9の9基で、検出面での平面形は長軸40~50cm、短軸36~46cmの不整な円形を呈する。P4-5間はSI1調査で掘り下げてしまったため、ピットの有無は不明である。全体的に柱筋は不揃いで、P2-3、P6-7、P9の位置がやや外に出る。柱間距離はP3-4間、P7-8間がやや広い。ピットの底面標高は46.1~46.6mを測るが、特に北側のP1・8の標高は低く、逆にP3・4の標高は比較的高めである。

本遺構から遺物は出土していないが、先後関係からSI1埋没後に掘り込まれた建物といえる。

**SB5 (第17図、表2・12、PL.8・9)**

調査地中央北寄りのJ4グリッドに位置する。II層上面において検出し、周辺の標高は約46.5mである。柱穴の一部がSD2・6と重複するが、先後関係は明らかではない。

検出した遺構の規模は、桁行3間(約4.9m)、梁行1間(約2.1m)で、主軸方向はN-2°-Wである。柱穴を8基(P1~P8)確認したが、SD2と重複する北東隅の柱穴は残存しない。平面積は10㎡程度と推定できる。検出面における柱穴の規模は、径27~54cm、深さ13.5~35cmを測るが、掘り方上位の多くは後世の削平により失われているとみられる。

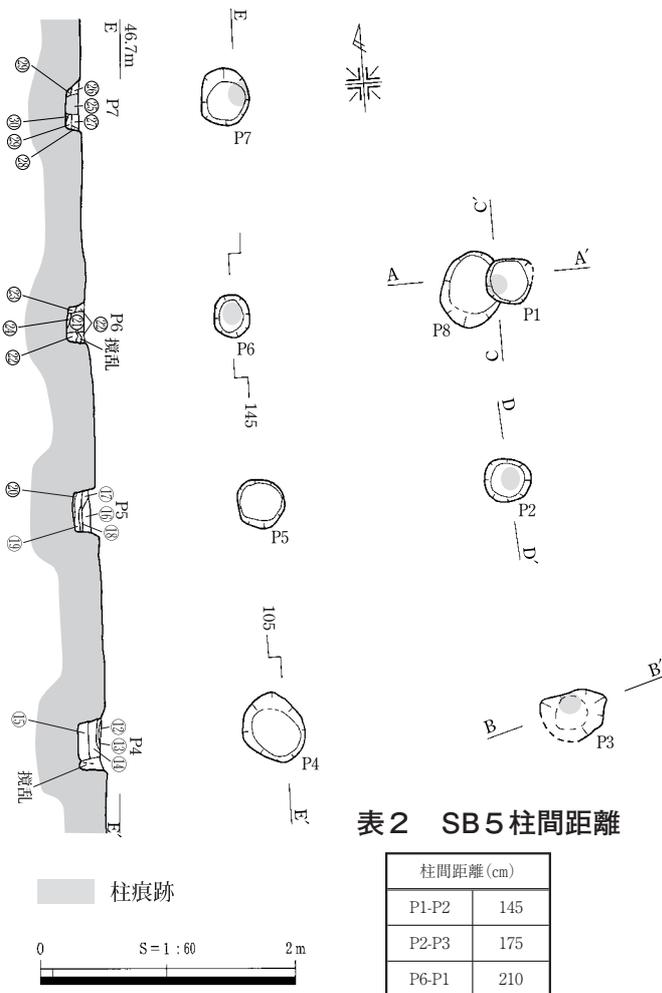
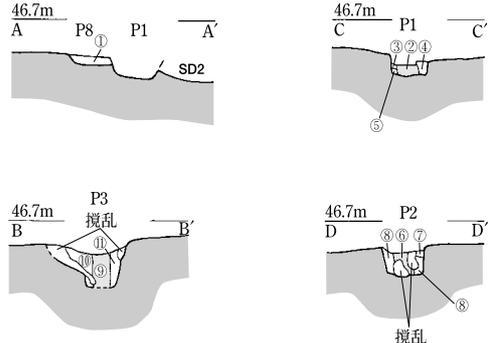


表2 SB5柱間距離

柱間距離 (cm)	
P1-P2	145
P2-P3	175
P6-P1	210
P6-P7	165



- ① 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ② 黒褐色土 (10YR3/1) 柱痕跡。φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。締りやや弱。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒多混。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1~2 cm程度のロームブロック多混。粘性やや強。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR3/1) 柱痕跡。φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒多混。締りやや弱。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒混。
- ⑨ 黒色土 (10YR2/1) 柱痕跡。φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ⑩ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1~2 cm程度のII層ブロック混。
- ⑪ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ⑫ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ⑬ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒多混。
- ⑭ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1 cm程度のII層ブロック少混。
- ⑮ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm程度のII層ブロック多混。締りやや弱。
- ⑯ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1~2 cm程度のII層ブロック多混。締り・粘性やや弱。
- ⑰ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1~2 cm程度のII層ブロック多混。締りやや弱。
- ⑱ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1~2 cm程度のII層ブロック少混。締りやや弱。
- ⑲ 灰黄褐色土 (10YR5/2) φ 1 cm程度のII・III層ブロック多混。
- ⑳ 灰黄褐色土 (10YR5/2) III層主体のロームブロック非常に多混。
- ㉑ 黒色土 (10YR2/1) 柱痕跡。φ 1 cm以下のローム粒混。
- ㉒ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ㉓ 黒褐色土 (10YR3/1) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ㉔ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm以下のローム粒多混。
- ㉕ 黒色土 (10YR2/1) 柱痕跡。φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ㉖ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。
- ㉗ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm以下のローム粒少混。締りやや弱。
- ㉘ 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1 cm程度のロームブロック多混。
- ㉙ 黒褐色土 (10YR2/2) φ 1 cm程度のロームブロック少混。
- ㉚ 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 1 cm程度のロームブロック非常に多混。

第17図 SB5

P1～3・6・7において、柱痕跡と思われる堆積を確認した(②・⑥・⑨・⑳・㉕層)。柱穴の遺存状態が不良で不明瞭な箇所もあるが、柱痕跡とした場合、柱の径は15cm程度となる。全般に柱筋の通りは悪く、特に東側桁は著しい。埋土は黒褐色を呈するものが主体をなす。P1・P8は重複関係にあり、P1がP8を掘り込んでいる。P8埋土は他の柱穴埋土と近似するが、底面標高が他と異なり、別遺構に伴う可能性も考えている。

本遺構からの出土遺物は無く、帰属する時期は不明である。

### 3 道路状遺構(巻頭PL.1、第19～22図、表4・5、PL.10・11・24～26・33)

L4～L7グリッドに位置する。I層上面で検出し、周辺の標高は46.5～47.1mを測る。南北方向に直線的に延び、調査区を貫通するが、L4グリッド付近は削平のためほとんど遺存していない。

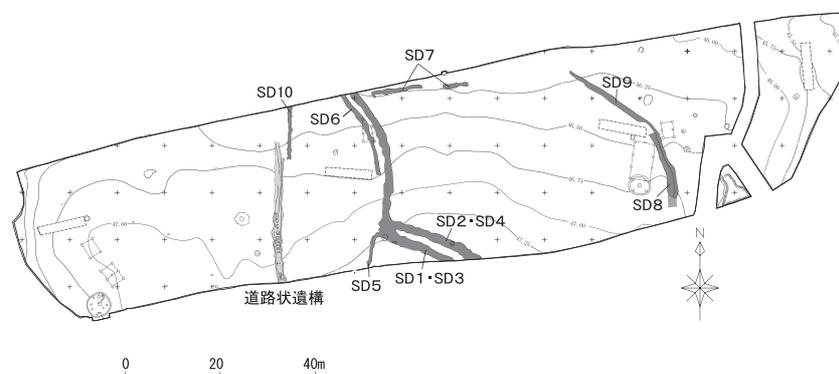
検出面における規模は、幅1.6～2.1m、深さ8～18cmを測り、調査当初は浅い溝状遺構と認識していた。しかし遺構底面において、平面形が不整な楕円形状の連続する浅い凹みを確認し、いわゆる波板状凹凸面に相当すると考えた。加えて、地山が硬く締まった範囲(以下、「硬化面」と呼称する)を溝底面・壁面にかけて確認したことから、道路状遺構として調査を進めた。

埋土は黒褐色を呈し、基本的に良く締まる(①層)。当層中は、土器片を中心に多数の遺物を包含する(第19図、PL.10・11)。遺物は、検出範囲中では中央付近(L6・7グリッド)に集中する傾向にあり、溝底面直上での出土は無く、底面から浮いた状態で検出した。

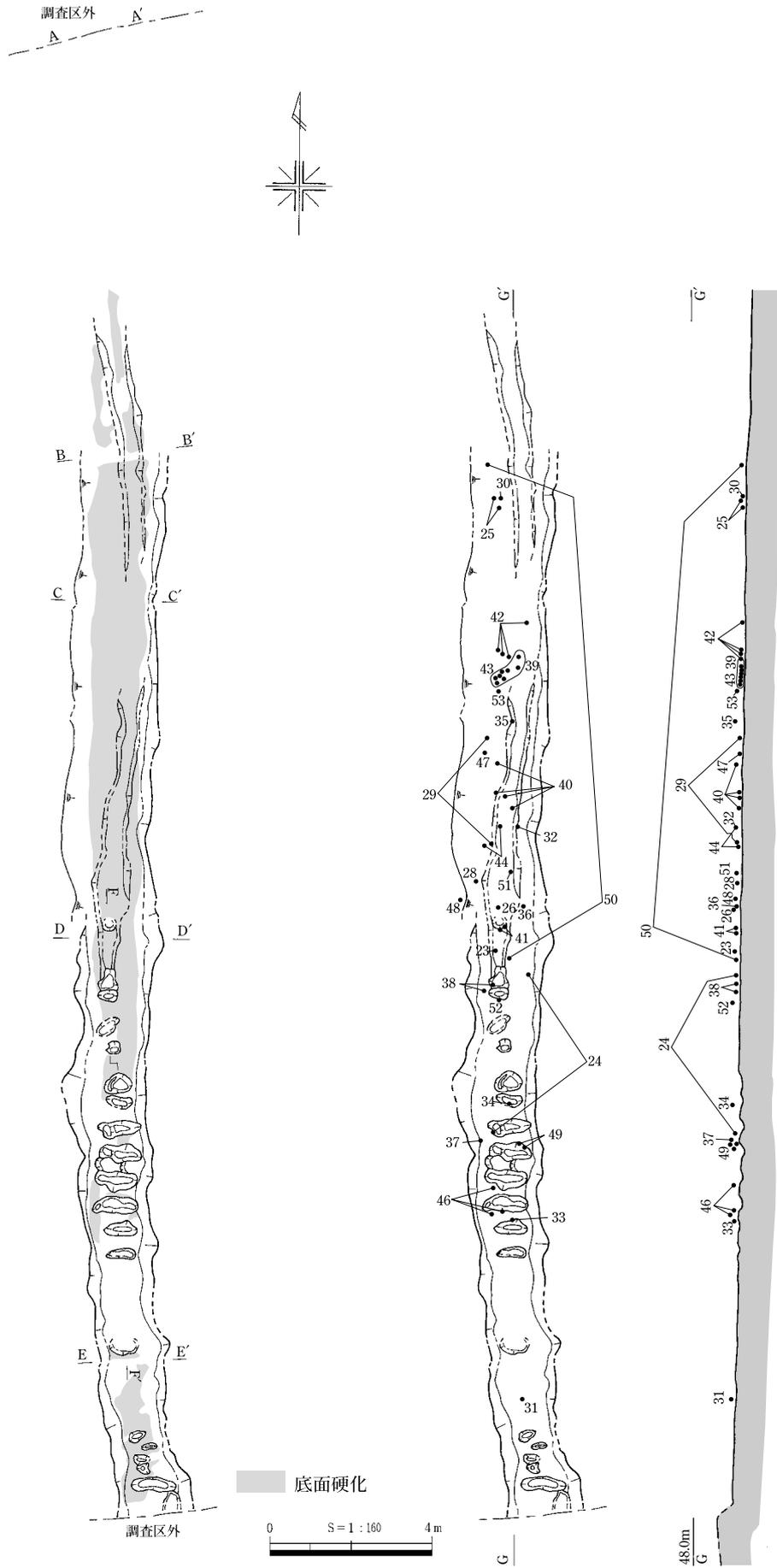
波板状凹凸面は、検出範囲の南半で認められる。遺存状態が不良で途切れる箇所があるものの、凹みは20～30cm程度の間隔で連続する。凹みの平面形は、不整な楕円形を基本とするが円形に近いものもみられ、規格的な印象は受けない。深さは5～10cm程度である。埋土はにぶい黄褐色を呈し、①層ほどの締りは無い。検出範囲におけるほぼ中央、L6グリッド付近で波板状凹凸面は途切れ、以北は幅60cm程度、深さ5cm前後の小規模な溝状となり、以降続いている。

遺構底面や壁面の立ち上がり付近で認められた硬化面は、遺存状態が良好な箇所では幅1.2～1.5m程度を測る。後世の攪乱により、所々途切れるが、本来は遺構底面全体に存在した可能性が高い。ただ、波板状凹凸面における凹み内は、基本的に硬化していない。一方、波板状凹凸面に続いて設けられる小溝内においては硬化しており、様相が異なっている。

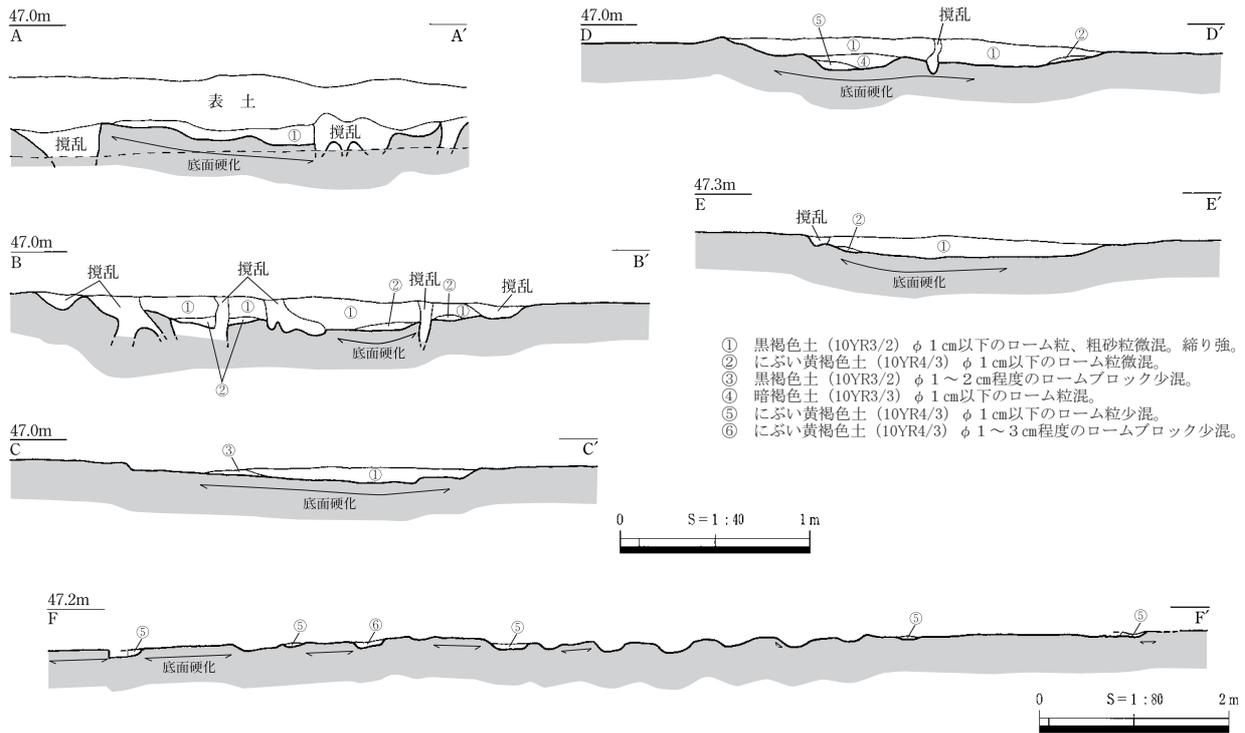
第21・22図に出土遺物を掲げた。先述したように、埋土①層中において土器を中心に多数検出した。



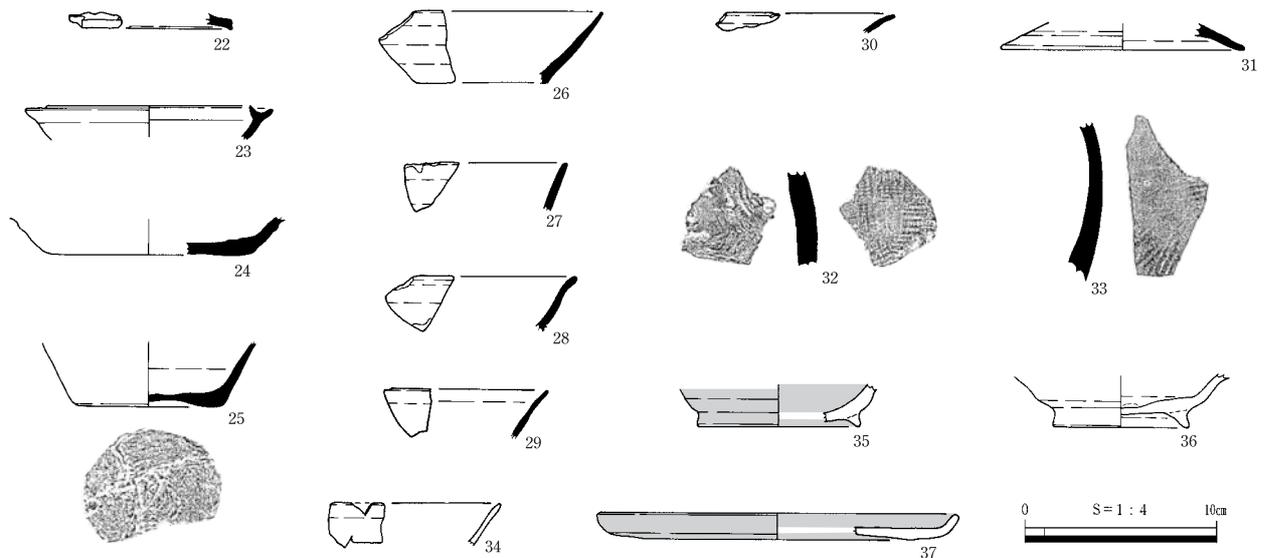
第18図 道路状遺構・溝状遺構位置図



第19図 道路状遺構(1)



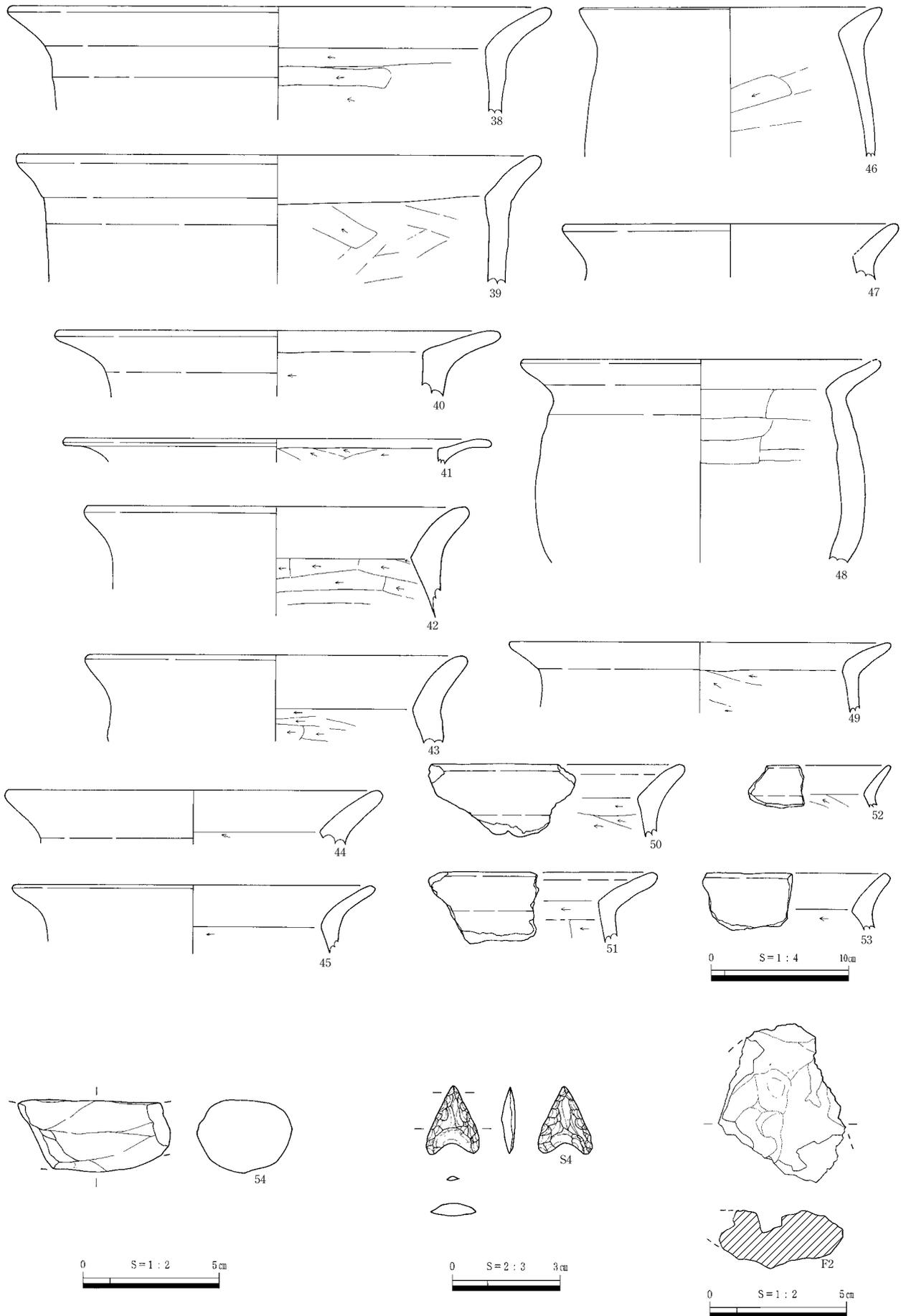
第20図 道路状遺構(2)



第21図 道路状遺構出土遺物(1)

主体となるのは古代に帰属する土師器、須恵器で、中では土師器甕の出土が目立つ。土器は大半が小片であり、各々の接合状況は不良で完形に復元できる個体は無い。また、全般に磨滅が著しい。他の出土遺物としては、石器(石鏃、S4)、鍛冶関連遺物(鉄滓、F2)がある。

第21図22～33は須恵器である。22は坏蓋で、端部がわずかに下垂する。23～29は坏である。23は径10.6cmと小振りで、口縁部の立ち上がりも小さい。陶邑編年におけるTK217型式併行期に該当しよう。24・25は口縁部を欠く。24は底部資料で、器形の詳細は不明である。底部切り離しは回転ヘラ切りである。25は薄手の器壁を持ち体部は直線的に外傾するもので、焼成はやや不良である。26～29は小片だが25と概ね同タイプと考えられ、全般に焼成はあまい。28・29は口縁部が外反気味となる。30は遺存状態が不良だが、皿と考える。焼成は25等と同様に不良で磨滅が著しい。31は



第22図 道路状遺構出土遺物(2)

器種不明で、脚部としたが器形的に類例が見当たらず、皿の可能性も考える。32・33は甕の体部資料である。32は外面平行叩き、内面には同心円状当具痕が入る。33は磨耗のため不明瞭だが、同様な調整と考える。

34～37は土師器である。34は坏の口縁部資料。内外面赤彩される。35・36は高台付坏である。いずれも底部周縁に断面三角形の高台が付く。35の高台はやや小振り、器面には赤彩の痕跡がわずかに残る。36は底部で屈曲気味となり、体部が大きく開く器形を為すと考える。赤色顔料塗布の痕跡は無く、胎土は36と異なり明赤褐色を呈する。37は皿である。底部切り離しは回転ヘラ切りで、内外面赤彩されている。

第22図38～53は土師器の甕で、全て口縁部が「く」字状に屈曲するものである。器形的な特徴は大差ないが、法量に大小があり、器壁が薄く調整が比較的丁寧なもの(41)がみられるなど、個体差は認められる。54は甑形土器の把手片と考えられる。磨滅が著しい。

S4は石鏃である。埋土上層で出土したが、本遺構に直接伴うものではない。やや浅い抉りを持つ凹基式で、サヌカイト製である。裏面中央に素材面を残す。F2は椀形鍛治滓である。全体のうち5分の3程度の残存と考えられる。下面には、炉床に由来するとみられる粘土質溶解物が付着する。

以上、出土遺物を概観してきた。出土土器相について、若干の時期幅は認められるものの、須恵器の坏(25～29)、皿(30)の特徴から9世紀～10世紀前後に比定される。これらは出土土器中では新相を示すとともに、主体をなすと考えられ、本遺構の帰属する時期を示すものであるといえよう。

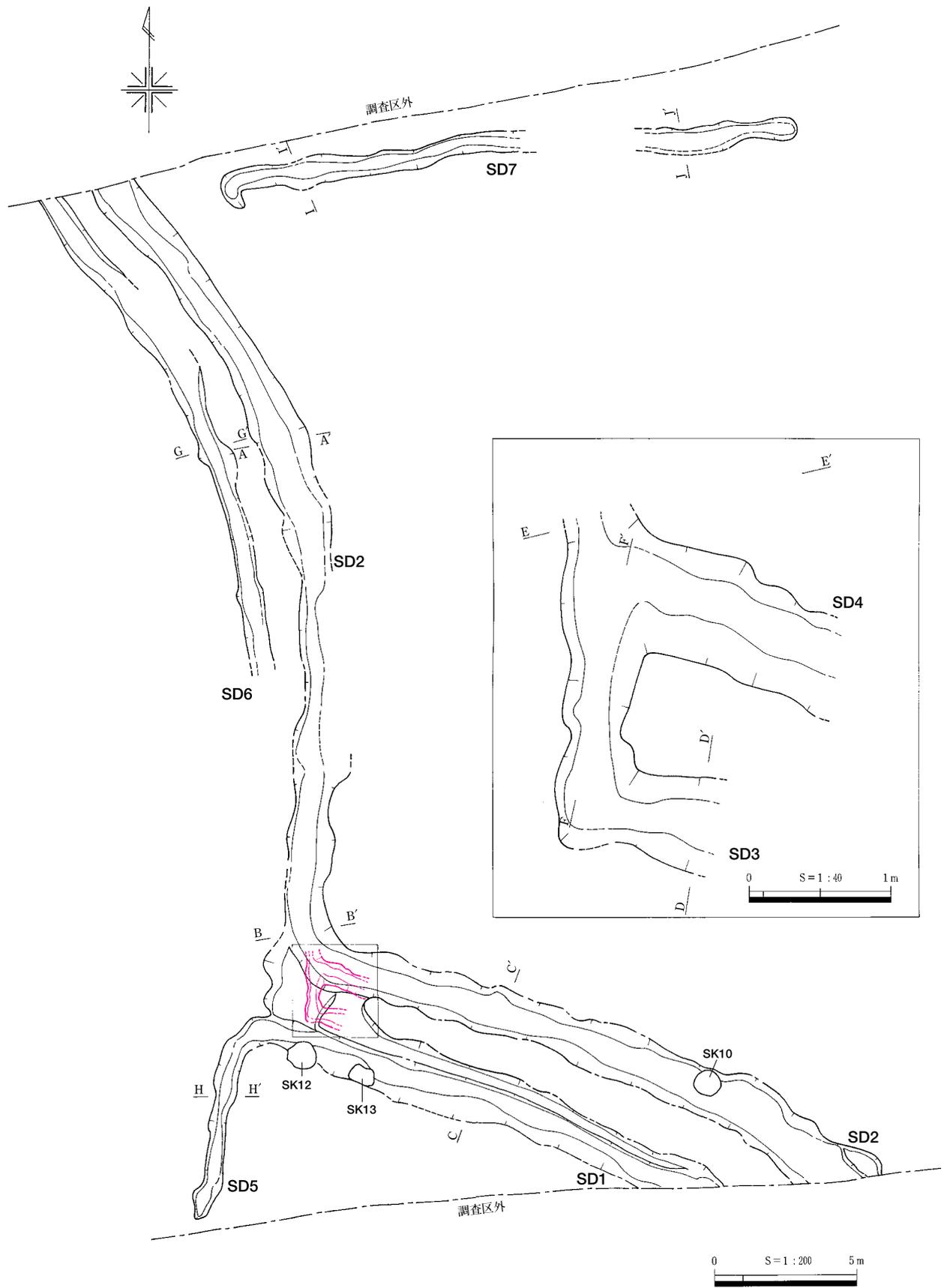
#### 4 溝

本調査において、溝は10条確認した。調査区ほぼ中央で確認したSD 1～7、東側で確認したSD 8・9については、それぞれ至近に位置し互いの関連性が窺われることから、まとめて掲載することとした。SD 1～7のうち、SD 1・2・5がJ 6グリッドで重複するが、それぞれの遺存状態が不良なこともあり先後関係は不明である。SD 3・4は、SD 1・2埋没後設けられた小規模な溝である。SD 7は東西方向に延び、東側の延長線上にはSD 9が位置する。両溝を結ぶラインは現道と並行しており、SD 7・9と現道との関係が窺われるが、遺存状況がよくないため詳細は不明である。

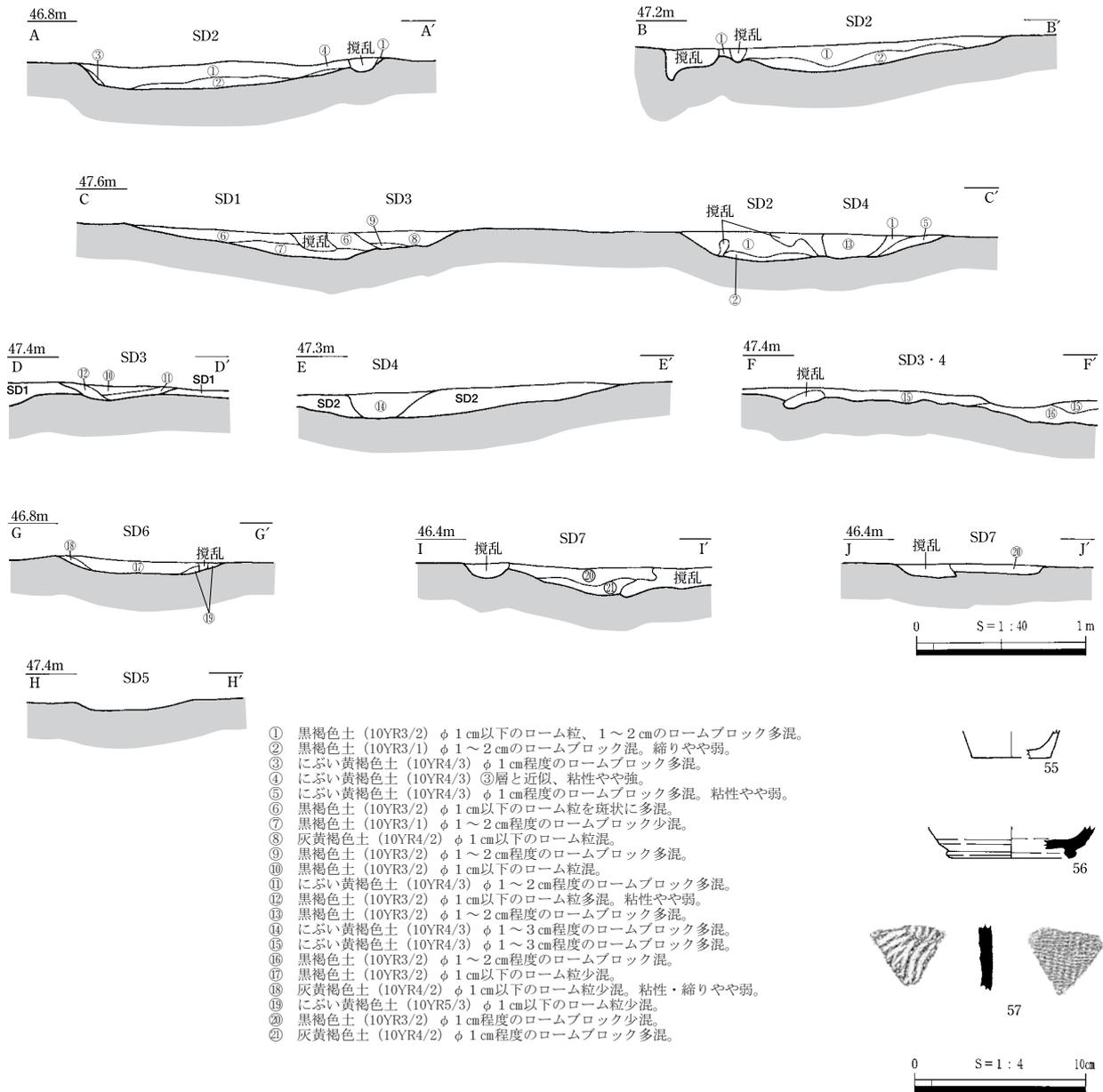
##### SD 1～7 (第23・24図、表5、PL.12～14、26)

SD 1・2はいずれも調査区外から延び、H7、I6・7、J6・7グリッドにおいて南東から北西方向に並行する。それぞれの規模は類似し、検出面における幅は1.4～2m程度、深さは約18cmである。SD 1の掘り方はJ 6グリッドで不明瞭となり、SD 2はそこから北方向へほぼ直角に折れると考える。以降、SD 2は北を指向し、J 4グリッド付近からは北西へやや方向を変え、調査区外へ続く。両溝の埋土はロームブロックが混じる黒褐色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。SD 1はSK12・13と重複関係にあり、SK12に掘り込まれている。SD 2はSK10、SB 5との重複箇所を有するが、いずれも先後関係は判然としない。SK10は製炭土坑とみられ、埋土中には炭化物を多量に包含していたが、付近のSD 2埋土中では、目立った炭化物の出土は認められなかった。このことを勘案すると、SD 2がSK10を掘り込んだ可能性があるが、明確な根拠は無い。

SD 3・4はSD 1・2と同様にJ 6グリッドで合流し、当該箇所では平面的に検出できたが、他では不明瞭である。ただ、I 7・J 6グリッドにおけるSD 1掘り方の北辺は段状を呈し、SD 3掘り方の痕跡と考える。合流箇所におけるSD 3・4の先後関係は不明瞭で、併存した可能性もある。



第23図 SD1～7(1)



第24図 SD 1～7 (2) 及び出土遺物

調査区中央南側で検出されたSD 5はほぼ南北方向に延びる。検出面での幅は約60～90cm、深さは5～10cm程度と遺存状態が不良である。平面的にみるとJ 6グリッドでSD 1と重複するが、この地点で屈曲したと理解すれば、同一溝の可能性も考えることができる。また、北方向の延長上にはSD 2がある。遺存状態が不良で具体的な検討は不可能だが、少なくともSD 1・2との関連性は高いといえる。

SD 6は検出面での幅約1m、深さ10cm弱と残存状況が不良だが、SD 2と並行し調査区外へ続いており、SD 5と同様、SD 1・2との関連性の高さが窺われる。また、SB 5の柱穴と一部重複するが先後関係は判然としない。

SD 7はH～J 3グリッドに亘り検出され、東西方向に延びる。ただ、本遺構も残存状況が悪く、各所で途切れる。検出面での幅約0.7～1m、深さは10cm弱～17cm程度である。西側はSD 2の直前で途切れ、互いの関連は不明である。

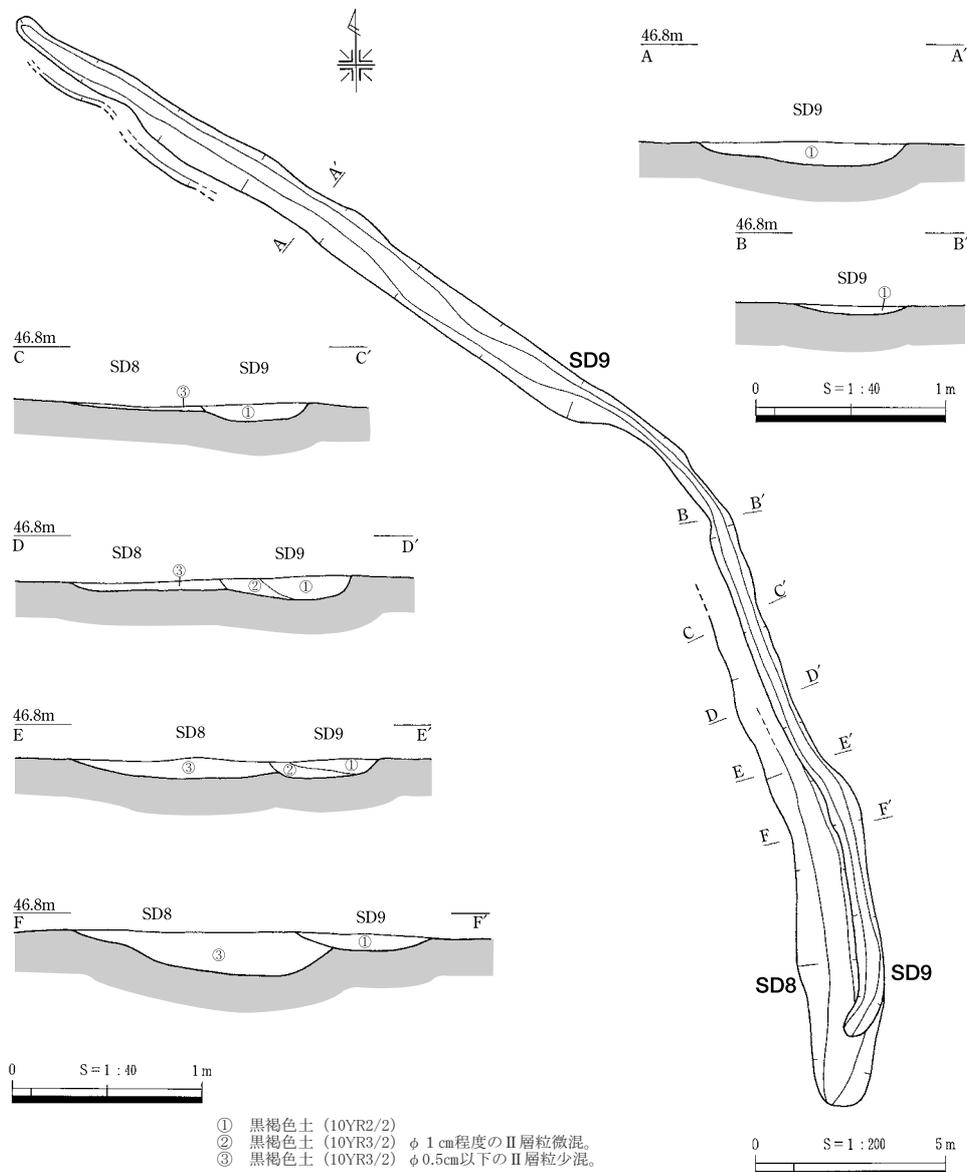
各溝埋土からの出土遺物は少数にとどまり、SD 2からは土器片が数点出土している。第24図55は

土師器の坏。底部切り離しは回転糸切りか。細片のため詳細は不明だが中世以降の資料と想定される。56・57は須恵器である。56は高台付坏、57は甕の胴部片でいずれも古代に帰属し、本遺構に直接伴うものではないと考える。このように、上述した溝群の帰属時期については、判断材料に乏しく、詳細は不明である。

SD8・9 (第25図 PL.14・15)

D4～6、E3・4、F3グリッド、II層上面において検出された溝で、周辺の標高は46.3～46.7mである。両溝は重複関係にあり、SD8→SD9の順に営まれている。SD8は、大半をSD9に掘り込まれ遺存状態は不良だが、検出面での幅約1.8m、深さ約23cmを測る。D4グリッドではSB4のP1と重複するが、遺存状態が不良で先後関係を判断できなかった。SD9は幅0.5～1.35m、深さは14cm程度と浅く、後世の削平を多分に受けていると推測できる。

南側(D6グリッド)で両溝はほぼ重なりながら北西方向へ延び、SD8はD4グリッドで深さを減



第25図 SD8・9

じ、途切れる。以降、SD9は緩く弧状にカーブしながら北西方向へ延びるが、F3グリッドで途切れ、以降の状況は不明となる。埋土はいずれもローム粒が混じる黒褐色土を主体とし、流水の痕跡は窺えない。

遺物は詳細不明な土器細片が数点出土したにとどまり、帰属する時期は不明である。

### SD10(第26図、PL.15)

L4・5グリッドに位置する。II層上面で検出し、周辺の標高は約46mである。

ほぼ南北方向に延び、北側は調査区外へ続く。南側はL5グリッドで攪乱により掘り方が不明瞭になり、途切れる。検出面における幅は約80cm、深さは30cm弱である。道路状遺構と至近に位置しほぼ並行するが、重複箇所が調査地内では無いため先後関係は不明である。

埋土はローム粒を多量に含む黒褐色土を主体とするが、根による攪乱を盛んに受けている。流水の痕跡は窺えない。遺物の出土はなく、帰属する時期は不明である。

## 5 土坑

### SK1(第27図、PL.16)

M7グリッド、標高47mに位置する。表土下、II層上面精査中に検出した遺構である。

平面形は長軸1.23m、短軸1.14mの歪な円形で、検出面からの深さは1.64mを測る。埋土は黒褐色土を主体とし、10層に分かれる。このうち、⑨層は壁体の崩落土である。堆積状況から、自然堆積により埋没したものと考えられる。

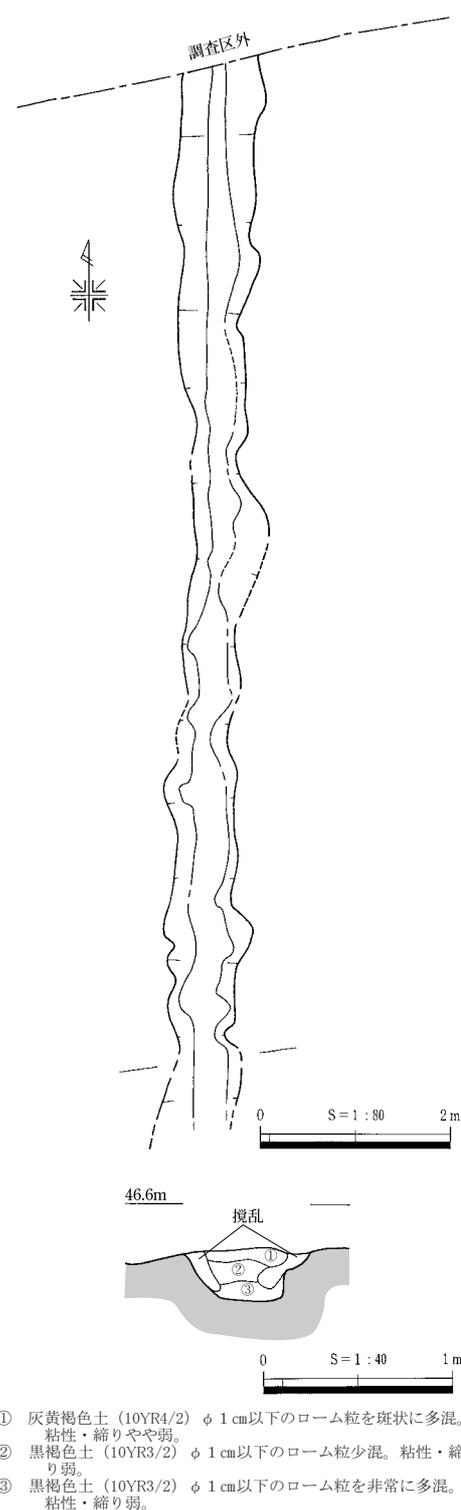
本遺構は、規模、平面形態から落とし穴と推測されるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### SK2(第28図、PL.16)

K5グリッド、標高46.7mに位置する。

I層上面検出の遺構である。平面形は長軸1m、短軸0.9mの長方形で、検出面からの深さは1.66mを測る。埋土は10層に分かれ、黒褐色土と灰黄褐色土を主体とする。このうち、⑨層は壁体の崩落土と推測される。堆積状況から、自然堆積により埋没したものと考えられる。

本遺構は、規模、平面形態から落とし穴と推測されるが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第26図 SD10